フットサルプレイヤーの専門志向化とその背景

小林　大地　　丸山富雄

キーワード：フットサル，専門志向化，普及発展

The characteristics of Futsal players
and their background

Daichi Kobayashi　Tomio Maruyama

Abstract

The purpose of this research is to clarify the characteristic of Futsal players by studying relevance to their leisure time, motivation, and sports participation. I did a questionnaire survey to 167 Futsal players. I found that the reason why they play Futsal is depends on their participation frequency, and classify them into 3types.

1,those who play Futsal infrequently, to make communication or as a recreation

2,those who play Futsal once a week, to maintain their health

3,those who play Futsal more than twice a week ,to play Futsal itself

The more they focus on Futsal,the more chances to participate competition they get, and higher level competition they join. Also, they have more Futsal shoes and spend more money for Futsal. The research about the leisure time and motivation does not show much difference, but when it comes to the aim to play sport, to have fun is biggest reason, especially for type1 players. Another biggest reason for type2 is for health and for type3 is for victory. As a result, there are some similarities between the aim to play Futsal and sports.

Key Words: Futsal , The characteristics , Spread development

Ⅰ. 緒言

フットサルは元来サッカーから派生したスポーツであり、ミニサッカーやサロンフットボールという名前で親しまれていた。その後、1994 年に FIFA(国際サッカー連盟)により競技名称が「Futsal」と定められ、日本でもミニサッカー、サロンフットボールと呼ばれていたものがフットサルと呼ばれるようになった。

サッカーと類似した競技であるが、競技人口がサッカーは 11 対 11 に対し、フットサルは 5 対 5 の少人数、ピッチサイズがサッカーは縦 105 メートル横 68 メートルに対し、フットサルは縦 40 メートル横 20 メートルの小スペース、また、フットサルにはオフサイドがなく、激しいボディコンタクトも禁止されている。

フットサルの特徴は少人数、小スペース、クリーンでフェアにプレーするような競技規則が設けられており、年齢、性別関係なく、いつでもどこでも手軽に楽しめるレクリエーションスポーツとして人気が高まっており、近年では全国各地に民間のフットサル施設が増えている。

JFA(日本サッカー協会)は「いつでも、どこでも、だれでも」をスローガンに、競技スポーツとしての振興、コミュニティスポーツとしての振興の両面において普及活動を展開しており、2007 年には、日本フットサル連盟により、フットサルのプロ化に向けた全国リーグである F リーグが開幕されるなど、競技スポーツとしての普及活動が活発化されてきているが、F リーグでは競技としてではなく普及発展の目標もある。その目標とは、「フットサルならではの特色を意識し、「見る」スポーツとして、人々を魅了することを追及すると同時に、「する」スポーツとして、フットサル・コミュニティの輪を大きく広げてゆくことにも努力することで、スポーツを「見る」ことと「する」ことを近づけ、日本人のスポーツの楽しみ方を広げてゆく。」ことである。また「競技スポーツやレクリエーションとしての位置づけに留まらず、中高年の健康対策としてのスポーツの位置づけや、生涯スポーツとしての位置づけ、気軽に取り組める女性のスポーツとしての位置づけ、などについても自覚的に取り組んでゆく。」と記載されている。

現在フットサルの愛好者は全国に 200 万人であると言われているが、「2016 年までに、フットサルの愛好者を 400 万人に増やす」というような目標もあり、普及発展に向けての取り組みが行われている。

普及発展の取り組みにおいて、宮城県の事例では、宮城県はフットサルの民間施設が充実しており、施設の利用者を取り込んで子どもから大人まで誰もが楽しめる大会として「JFA フットサルエンジョイ大会」を実施しているなど、精力的な普及発展活動が行われている。

しかし、サッカーは 1993 年に J リーグが開幕し、1998 年に日本はフランスワールドカップで初出場を果たし、2002 年には日本でワールドカップが開幕されるなど、サッカーは盛り上がっているのに対し、フットサルはテレビをはじめメディアであまり多く見かけない。学校における部活動においてもサッカー部はあるが、フットサル部はないというところが多く、競技人口もサッカーに比べるとフットサルはまだまだ少ない。

今後、更なる普及発展にあたり、フットサルをプレーするプレイヤーの現状を明らかにしていく必要性があると考える。

しかし、フットサルに関する活動状況や意識調査に関する報告はあるものの、フットサルをスポーツやレクリエーションの専門志向化という枠組みで分析した研究は見当たらない。現在、普及発展途上にあるフッ

トサルは、このような専門志向化研究の最適な研究対象であるといえるだろう。

＜フットサルに関する先行研究の検討＞

フットサルに関する先行研究はあまりなく、ここでは以下の２つの先行研究を検討した。

森恭、桒原公(2001)「フットサルの普及過程について :～大会参加者の意識調査より～」新潟大学教育人間科学部紀要 第４巻 第１号 189～198 頁

「フットサルを楽しんで行いたいという人々が多く存在している。また、プレーを現在のレベルで楽しむのみならず、自らのレベルを高めたいプレーヤーも存在している。」

古本智大、入口豊、井上功一、中野尊志、大西史晃(2011)「フットサル普及の現状と展望」大阪体育大学紀要 第Ⅳ部門 第59巻 第１号　27～42 頁

「フットサルを競技スポーツとして取り組む競技者、レクリエーション感覚で取り組む愛好者など、個人の目的に応じた自由な広がりをみせている。」

以上の報告から、レクリエーションとして、健康増進のためや仲間づくり、社交の場としてフットサルをしている人や、競技としてフットサルに取り組む人など、フットサルへの関わり方は様々に広がってきている。

Ⅱ. 目的

前述のように、フットサルについての活動状況や意識調査に関する報告はあるが、スポーツやレクリエーションの専門志向化という枠組みで分析した研究は見られない。現在、普及途上にあるフットサルは、このような専門志向化研究の最適な研究対象、題材ともいえる。

それを踏まえ、本研究では、フットサルプレイヤーの専門志向化を明らかにし、余暇の実態や、意識、スポーツ参与程度等の関連性を検討し、フットサルプレイヤーの現状を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1）調査対象および調査時期

宮城県のフットサル施設で活動しているプレイヤーにアンケート調査用紙を配布し、その場で記入してもらい、その場で回収するという自己記入式質問紙調査を実施した。

調査対象は、性別、年齢、フットサルの活動歴に関わらず、宮城県内フットサル施設５箇所においてフットサルをプレーする全ての人を対象とした。

調査時期は 2015 年６月から８月までの期間に実施した。

2）アンケート用紙回収状況

回収数 180、有効回収数 167、有効回収率 (92.8%)

3）調査内容

調査内容はフットサルの専門志向化についての諸項目、および余暇や運動、スポーツについての実態や意識等である。

4）分析方法

データは SPSS で処理し、フットサルの参加頻度と各項目間比較のクロス集計で分析を行い、χ^2 検定で検定を行った。

＜レクリエーションの専門志向化モデルの紹介＞

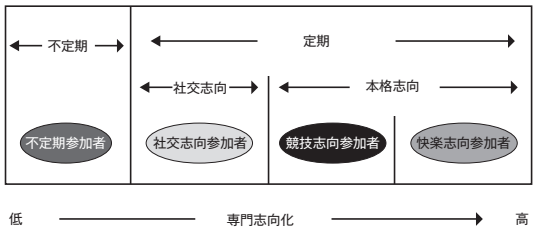

図1) レクリエーションの専門志向化の連続体（二宮,2007）

レクリエーションの専門志向化とは、「スポーツで使われる用具や性能、そして活動場面の選好によって反映される、一般から特殊に至る行動の連続体」としてBryan(1977)が提唱した概念である。

専門志向化は特定のレジャースポーツ活動に取り組む参加者を類型化するための概念的枠組みとして様々な研究に用いられている。例えば、トライアスロン参加者の環境配慮行動の研究(松井,2013)、外国人スキーヤー、スノーボーダー参加者の旅行日数に関する研究(工藤ら,2011)など、その他にハイキング、クライミング、バードウォッチングなど様々な野外レジャー活動の研究として幅広く適用されている。また、野外環境とは無関係なカードゲームでも専門志向化の概念が用いられた研究(二宮,2007)もあり、室内で行われるレジャー活動においても有効であることが報告され、本研究題材であるフットサルにも適用できると考えられる。

二宮(2007)はウインドサーフィン参加者を対象に専門志向化研究を行っているが、二宮らのモデルは日本レジャースポーツ参加者の類型化に有効な概念枠組みであると指摘されている(工藤ら,2011)。

二宮(2007)はレクリエーションの専門志向化の概念枠組みを用いて、フィールワークを行い、ウインドサーフィン参加者を不定期参加者、社交参加者、競技志向参加者、快楽志向参加者４つのタイプに類型化し、それぞれの行動様式の違いを明らかにした。

＜本研究の枠組み＞

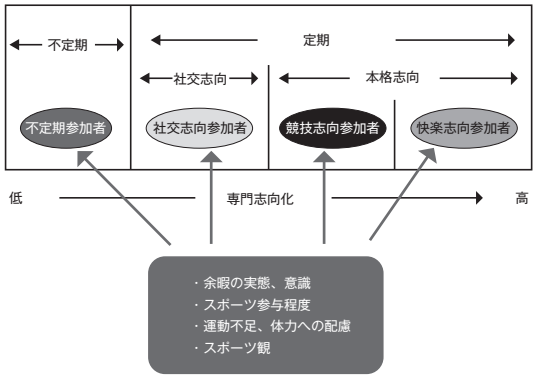

図2)　本研究の枠組み

本研究においても、日本の専門志向化研究において、代表的で幅広く認知、参考にされている二宮の専門志向化研究モデルを参考にし、フットサルの専門志向化と余暇の実態、スポーツ参与程度、運動不足、体力への配慮、スポーツ観などとの関連性を検討する。

Ⅳ. 結果および考察

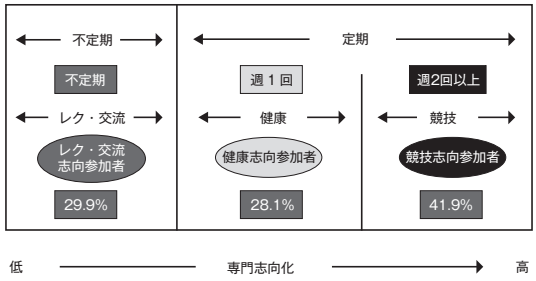

図3)　フットサルプレイヤーにおける専門志向化の連続体

今回の調査結果では、フットサル参加頻度により、フットサルに取り組む目的が異なる結果となった。この結果を二宮を参考に類型化すると図３のようなモデルとな

る。

不定期参加者は手軽なレクリエーションや交流を目的に、週１回程度の参加者は健康の増進や維持を目的に、週２回以上の参加者は競技を目的にし、参加頻度によって目的や意識が異なっており、大きく３つのタイプに類型化することができた。すなわち不定期参加者は「レク・交流志向参加者」、週１回程度の参加者は「健康志向参加者」、週２回以上の参加者は「競技志向参加者」と類型化できた。

フットサル参加者の場合、専門志向化の発達段階が高くなるほど、参加頻度、大会出場回数が増加し、より高いレベルの大会に出場し、フットサルシューズ、フットサルウェア、フットサルボールなどの用具の所有数が多く、習得技能数や技能向上意欲も高く、フットサルに関する雑誌、専門誌、ビデオ、DVD 所有数が多く、年間活動費用も高くなっていく傾向にあった。

余暇の実態や意識、間接的スポーツ参与はフットサルプレイヤーの専門志向化のレベルが高くなっても特に有意な差はなかったが、スポーツをする目的、運動やスポーツは暇つぶしであるというスポーツ観、運動不足感、体力・健康への配慮の項目については異なる結果となった。

スポーツをする目的に関しては、全ての参加頻度で楽しさを求めてスポーツしたいという回答が多かったが、レク・交流志向参加者は楽しさが突出して多く、健康志向参加者は楽しさに次いで健康のためが多く、競技志向参加者は楽しさに次いで勝つことのためが多く、類型化したモデルと類似した傾向にあった。

運動やスポーツは暇つぶしであるという質問に対して、レク・交流志向参加者、健康志向参加者に比べて競技志向参加者は特に暇つぶしでないと考えている傾向にあった。

運動不足感についても、レク・交流志向参加者、健康志向参加者は運動不足感を感じているが、競技志向参加者は運動不足感を感じていない方が多かった。

体力・健康への配慮は全ての参加者が「ときどき注意している」が最も多かったが、競技志向参加者は「特に注意している」という回答が、レク・社交志向参加者、健康志向参加者に比べて多かった。この結果はＦリーグが目指している健康対策ということにも該当する結果となった。

また一方で、古本ら(2010)のフットサルの活動状況や意識調査の報告でも、本研究とは別の研究手法ではあるが、フットサル競技志向者はフットサルの実施頻度は週２回以上が最も多く、フットサル愛好者は週１回程度が最も多かったと報告されており、本研究の結果を支持できるのはないかと考える。

＜先行研究との比較＞

二宮(2007)のウインドサーフィンの事例では、「快楽志向参加者」という類型が抽出され、その特徴は競技目的ではないが、高いレベルで活動を楽しむことを目的とし、定期的に活動しており、技術レベルも高く、過去に頻繁に大会に出場していたが、現在は大会に出場していない者である。

フットサルプレイヤーの場合、競技を目的に定期的に活動し、技術レベルの高いプレイヤーは、所属チームも競技志向のチームに所属にしている者が多く、現在も大会に出場している傾向にあると考えられる。二宮(2007)の研究では快楽志向参加者というモデルが提示されていたが、フットサルプレイヤーの場合にはこれに該当する参加者は今回の調査結果ではみられなかった。

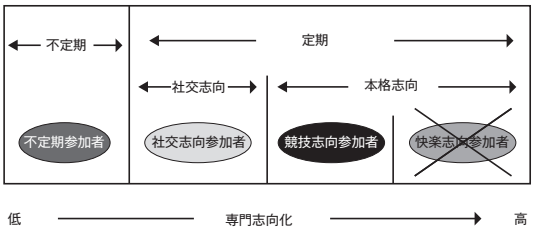

図4) ウインドサーフィンにおける専門志向化の連続体

フットサルはサッカーなどに比べると中学、高校の学校の部活動や施設などもまだ少ない。サッカーＪリーグは1993年に開幕したのに対し、フットサルＦリーグは2007年に開幕するなど、まだ普及、発展途上にあるスポーツであり、二宮(2007)がウインドサーフィンに用いた快楽志向というモデルが適用できる段階までに至っていないと考えられる。さらに、フットサルという手軽なスポーツという特徴から「健康志向参加者」という類型も抽出できたこともウインドサーフィンの事例とは異なる結果となった。

Ⅴ. 提言

＜定期的にフットサルに取り組むための施設の取り組みや工夫の必要性＞

不定期の参加者は大会には比較的に出場している傾向があった。しかし、フットサルを定期的に行っていないことから、不定期参加者のようなフットサルにあまり取り組んでいない人にも出場しやすいレベルの大会数を増やす、初心者向けのクリニックなどの講習を増やす、個人参加型のフットサルや初心者向けのレベルを設けるなど、不定期参加者がフットサルを定期的に取り組めるような入口を拡げてあげる取り組み、フットサル施設に足を運んでもらうような取り組みなどの工夫がフットサル人口の増加に繋がると考えられる。

また、今回の結果から不定期、週１回程度のプレイヤーは運動不足感を感じている傾向があったが、週２回以上のプレイヤーは運動不足感を感じていない傾向があった。健康への配慮も不定期、週１回程度のプレイヤーよりも週２回以上のプレイヤーの方が健康への配慮を常に注意しているプレイヤーが多かったことから、健康の維持増進に少なからず影響している結果となっていた。週１回程度で定期的にフットサルに取り組んでいるプレイヤーでも、週２回以上取り組めるような環境をもっと身近に作ることができれば、Ｆリーグが掲げる目標でもある健康対策として、運動不足の解消、健康の維持増進にも繋がっていくのではないかと考えられる。そのためには、勝敗を意識した競技志向のフットサルチームだけではなく、レクリエーション感覚、交流などを目的に楽しく参加できるフットサルサークル、フットサル上達のための初心者向けのフットサルチームなど、様々な人々のニーズに沿ったサークルやチームの更なる増加が必要であると考えられる。個人的にサークルやチームなどを立ち上げる人もいるが、フットサル施設側でもそのようなサークル、チームを積極的に立ち上げる取り組みが更なる普及、発展に繋がっていくのではないかと考えられる。

Ⅵ. 課題

今後の課題と研究の限界として、調査対象が宮城県内のフットサル施設を利用するフットサルプレイヤーに限定していたことである。各都道府県によって普及、発展に少なからず差があると考えられ、調査対象を全国に拡げ、調査人数を増やすことによって、二宮(2007)がウインドサーフィンに用いたモデルの「快楽志向参加者」がいるなど、本研究とは結果の違った傾向になったかもしれない。この点は本研究の限界であるといえる。今後はこれらの課題を踏まえ、調査対象を更に拡げ、研究していきたい。

Ⅶ. 参考文献

古本智大、入口豊、井上功一、中野尊志、大西史晃(2010)「フットサル普及の現状と展望(Ⅰ)」大阪体育大学紀要 第Ⅳ部門 第58巻 第2号 35～52頁

古本智大、入口豊、井上功一、中野尊志、大西史晃(2011)「フットサル普及の現状と展望（Ⅱ）」大阪体育大学紀要 第Ⅳ部門 第59巻 第1号 27～42頁

古本智大、入口豊、井上功一、中野尊志、大西史晃(2011)「フットサル普及の現状と展望(Ⅲ)」大阪体育大学紀要 第Ⅳ部門 第59巻 第2号 61～72頁

工藤康宏、二宮浩彰、石澤伸弘(2011)
「北海道ニセコリゾート訪日外国人スキーヤー&スノーボーダー調査研究 Ⅱ：スポーツ・ツーリストの専門志向化と旅行日数に着目して」体育社会学専門分科会発表論文集 第19号 239～244頁

眞境名オスカー(2010)
「DVD 超実践! 名将・眞境名オスカー直伝!! フットサル 戦術の基本テクニック」スタジオタッククリエイティブ

丸山富雄 (1998)
「わが国における階層構造とスポーツ参与の研究」昭和62・63年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書

松井くるみ(2013)
「スポーツ参加者の環境配慮行動：トライアスロン参加者を事例として」
早稲田大学　博士論文

森恭、桒原公(2001)
「フットサルの普及過程について ～大会参加者の意識調査より～」新潟大学教育人間科学部紀要 第4巻 第1号 189～198頁

二宮浩彰(2007)
「レクリエーションの行動科学」不昧堂出版

須田芳正、大嶽真人、依田珠江、田中博史(2003)
「日本のフットサルについて 現状と課題」日本体育学会大会号 第54号 526頁

須田芳正、大嶽真人、依田珠江、石手靖、田中博史(2004)
「日本におけるフットサルの普及に関する研究」体育研究所紀要 第43巻 第1号 7～13頁